



NO. 114
21.9.13
兵庫県粟田市教育委員会
社会教育課内
山崎郷土研究会
電話63-3000

維新のころの山崎藩(一)

清水 哲

一 はじめに

数年前に『江戸三百藩 最後の藩主』（八幡和郎著）という本を読んだ。幕末から維新の激動期に各藩がどう対応したかを書いてある。特に明治維新は大きな権力の変動であり、各藩にとって徳川幕府と維新政府のどちらにつくかは、藩の存続に直結するものであった。薩摩・長州・土佐・肥前などの雄藩やいきさつから対立した東北諸藩のみならず、山崎藩も含めて多くの中小の藩の対応について、何を参照して書いたのか気になっていた。

同じく数年前から、本多記念館の古文書学習会では、幕末の山崎藩関係の史料や庄家文書を読んできた。力不足の私は諸先輩の解説をメモするばかりだった。ひと区切りとしてまとめるとき、ここに取り上げた五つの史料に関しては非力を顧みず担当させて

目次

維新のころの山崎藩(一)	清水 哲	1
神谷ばなし(二)	森本 一二	8
江戸時代の播磨国鋳物師		
姫路の鋳物師の現地調査	片山 昭悟	14
塩山の歴史	谷井 伴夫	19
須賀沢の古墳を調査して	下村 哲三	21
当地方における異常気象	深川 定義	23
山崎歴史街道(十八)	会 報 部	24

もらった。学習会での解説と解釈をもとにして、私なりに調べて書いた。本稿はそのとき本多記念館古文書学習会の冊子『本多藩時代の山崎』第二集(二〇〇九・四)に載せたものを加筆修正したものである。いつも学習会の史料を準備し世話をしてくださった本多藩記念館の横井理事長、解説を教えてくださいました先輩諸氏には感謝するばかりである。

二 慶応三〜四年の状況

外国船の来航、開国へとむかう条約問題を契機に幕府の支配体

制はゆらぎはじめ、慶応二年（一八六六）は一揆・打ちこわしの件数がふえるなかで、幕府と薩長同盟の対立は抜き差しならないものとなっていた。

慶応三年（一八六七）十月十四日、徳川慶喜は大政奉還をし、徳川将軍家の生き残りを図った。奉還された側の朝廷はその後の政策を決めるため諸侯会議を開くべく、全国の大名を京都に召集した。しかし京都に参集した大名はわずかに十数藩にすぎなかった。このままでは徳川家の権力保持が続くと考えた倒幕派は、十二月九日に幕府の廃止と朝廷の改革を宣言し、王政復古のクーデター（政権奪い取り）を行った。だが、幕府も依然として存在し、大坂城にいた徳川慶喜も「上様」の名による統治を表明し、諸外国公使に外交事務の継続を伝え（十二月十六日）、さらに王政復古の取り消しを求めた。この時点では二つの政治権力が存在することになった。

「いや、二つでなく、將軍慶喜や京都守護職松平容保・京都所司代松平定敬らの京都における幕府勢力（「一会桑」）、それに反発する江戸の幕閣や譜代大名などの勢力、京都の幕府（一会桑）と対抗する薩長などの勢力、（それぞれの藩も一枚岩ではなかったようだが）この三つのグループが並立しており、多くの藩が情勢を見守っていたという説もある。家近良樹『孝明天皇と一会桑』（文藝春秋・二〇〇二）や井上勝生『幕末・維新』（岩波・二〇〇六）では、通説に疑問を投げかけており読めば読むほどわからなくなる。文久二年以降の政治状況を的確に書くことは

素人の能力を超えている。」

ところが、慶応四年（一八六八）一月三日に始まる鳥羽伏見の戦いで、約五千の倒幕軍は一万五千の幕府軍に対し優勢を保った。形勢が決着しない段階の同六日夜、徳川慶喜は大坂城を出て江戸に帰った。この展開の理由について池田敬正は、一に人心が幕府から離れたこと、二に諸藩が形勢をみて動かなかったことだとしており（岩波『日本歴史近代1』一九六七）、毛利敏彦は、新政府側は「勝ちを拾った」としている。（中公新書『幕末維新と佐賀藩』二〇〇八）

一月七日、新政府は徳川慶喜追討令を発し、十一日には、討幕のため兵を率いて京都に参集することを命じた（動員令）。ここにいたって、毛利敏彦の言うには、「様子をうかがっていた西日本諸藩は雪崩を打って」天皇政府側になびき、新政府の求心力は急激に高まったのである。下山三郎によれば「上京した諸侯および代理は二月末には相当数に」のぼった。（岩波『日本歴史近代1』一九七五）

保谷徹によれば、この状況に逆らうことの出来る西国大名はおらず、新政府はこの動員に應えるかどうかを「踏絵」として用いた。（吉川弘文館『戊辰戦争』二〇〇七）

二月十二日、慶喜は江戸城から出て謹慎し、三月十三・十四日の勝・西郷会談で江戸開城が決まった。降伏条件が徳川氏にとり寛大に修正された背景には、英国公使パークスの意向もあったと言われている。

新政府と諸侯の間で、支配・被支配を確認するため実施されたのが、三月十四日の「五か条の御誓文」であった。御所で天皇が神に誓い、在京の大名らが誓文に署名（奉答書に署名）した。のちに結局すべての大名が署名をおこない、本領安堵（領地支配権）が認められた。このあと東北・越後・函館の戦争を戦いつつ、新政権が樹立する。この誓文の儀式は、局外中立を守る諸外国に向けられた演出の側面もあったといわれている。

これらのことに関しては多くの教養書や学術書が書かれている。詳しいことはそれらの書物に任せ、ここでは維新という権力変動が、地方の中小藩の対応や人々の生活にどうあらわれているかにしほって考えたい。

三 参考にした史料

さて、「五か条の御誓文」や庶民向けに出されたという「五榜の揭示」は、日本史の教科書には重要事項として書かれているが、ここ山崎ではどうであったのだろうか。また、山崎藩藩主忠鄰（ただちか）のこの頃の動向、および維新の情報の伝達はどうであったのだろうか。

ここではまず、庄家文書の慶応三年・四年の『公私用日記帳』を中心にみてみよう。庄家は山崎藩の三人の大庄屋のひとつである。この慶応三・四年の日記は、当初体調不良ゆえの乱筆だったため、後年清書されたそうである。

山崎藩として様々なことを記録した覚帳は、慶応三年・慶応四

年のものがない。代わりに本多藩記念館所蔵の、岩崎又左衛門が記した『在京中日記』（明治元年四月十日、同年十二月十三日）、周旋方・柴田小膳による『御滞京中日誌』（明治元年十二月廿七日、明治二年一月廿九日）、最後の藩主本多忠明（ただあきら）名の『日記抜書』を通じて、藩の対応をみてみよう。これらの五つの史料以外はよく知らないもので、以下の記述に限界があることは否めない。

その他、『兵庫県史』史料編、近隣の市史・町史の史料も参考にした。また、東大史料編纂所のホームページにアクセスし、人名・藩名・年月日などで検索すると、『維新史料綱要』という維新関係史料集の内容を知ることができる。

尚、以下の記述では史料は読みやすいように書き下し文にしている。

四 備前藩による姫路攻撃

一八六八年一月上旬、西宮警備を命じられた岡山備前藩は、鳥羽伏見の戦いのち、山陽道の諸藩に対して幕府につくか新政府の側に立つかの厳しい選択を迫る役割を果たした。姫路藩主の酒井忠悳雅楽頭は前年末に老中になり、徳川慶喜に従って大坂城から江戸に逃れたため、新政府側から朝敵とされた。備前藩は姫路藩を追及するだけでなく、播州の諸藩に新政府の側に立つか否かの向背を問うた。

それらを物語る史料が『兵庫県史・史料編（幕末維新1）』

と、『姫路市史・史料編（近世3）』にある。姫路市史史料編には備前藩による「姫路討伐始末記」という長い報告書がある。また兵庫県史史料編には、関係した八藩からの報告書が引用されている。

「姫路討伐始末記」によれば、西宮警備に向う途中渋滞で困り姫路城外に駐屯していた備前藩は、一月十二日に姫路藩に勤王か否かの去就を問うた。姫路藩側は勤王と答え、その証拠として人質を出す話をしていった。新政府側から姫路討伐の応援命令がでたことを十六日に知った備前藩は、区切りと形をつけるために大砲を放った。姫路藩は人質三人を差出して降伏し、城は十七日に明け渡された。姫路藩士からの家名存続と民生安定の嘆願書、および今まで通りの生活を求める百姓惣代や町人からの嘆願書も「始末記」に収められている。備前藩による姫路城管理は三月末まで続いた。（私は姫路城攻撃に関してはこの二つの史料以外は読んおらず、解釈も間違っているかもしれない）

「始末記」によれば備前藩はこの頃、龍野藩・林田藩にも去就を問い兵を出すことを要求したが、更に十五日には小野藩・三日月藩・安志藩・三草藩および山崎藩にも去就を問う使者を送った。「始末記」が山崎についてふれているのはこれだけで、使者が山崎藩に行ったときどうなったかは何も書かれていない。備前藩が朝廷に提出した二月八日付の書面では、加勢の兵を出したのは赤穂藩・安志藩・小野藩・林田藩・福本藩・旗本池田氏などであった。

兵庫県史の史料編にもこの応援部隊に関して山崎藩の名前は出てこない。しかし、維新の政治的な波は、備前藩から「去就を問う」という形で山崎藩にも迫ったといえる。

五 庄家の史料からみる維新

庄家の公私用日記帳を案内役にしながら、約一年間の山崎藩の対応をみていこう。

(一) 慶応三年（一八六七）後半



公私用日記帳（庄家文書）

この慶応三年の五月、大坂定番の制度が廃止された。約一年前から大坂定番（じょうばん）として勤務していた山崎藩藩主の忠鄰

(ただちか・肥後守)は、六月になって江戸に向かったようである。庄家の慶応三年日記帳の五月廿六日の条に、「来月(六月)十日前後御発駕(はつが)につき、江戸へ御参府」とある。この道中旅費一万二千兩のうち、千五百兩を郷町が引受け、半分の七百五十兩を村方が用意してたことが記されている。そして日記の七月五日の条には、「殿様御着座、滞り無く相済み、御家老御奉行御代官、ほかに帰られたる家に(大庄屋)三人同道にて歎びに行くとあり、同月九日には村方が負担した七百五十兩が返されている。すなわち、藩主忠鄰は大坂の勤務を終えたあと一旦江戸に行き、その後七月に山崎に帰ったといえる。

さて、大政奉還のち朝廷は全国の大名に上京を命じていたが、十月廿五日には、十一月中に上京するように命じた。十一月中に上京したのは十数藩、十二月中に上京したのは約十藩であった。(前者に龍野藩主脇坂安斐、後者に林田藩主建部政世を含む)『維新史 第五卷』八頁によれば、まさに大名の多くはその去就に迷い、形勢をながめ、徳川氏と縁の深いものは徳川氏の權威をはばかり、或いは雄藩の意向を疑い、「病と称して上京の猶予」を願うか、「老臣を代理に上京さす」ことを願うものが多かったのである。

『維新史料綱要』の慶応三年十一月二十六日の条に、「本多忠鄰病を謝し、重臣を以て朝覲せしむることを稟す」(朝覲ちようきん君主に会う)とあるように、山崎藩も悩んで代理を送ったのであろう。庄家の日記帳をみると、慶応三年十一月十三日の条

には、十五日に家老の武間氏が京都に出発するとあるが、これと関係するのかもしれない。

庄家日記帳 慶応三年の暮れ

十二月十三日「夜前、京都表より樽井御氏早馬にて御帰国。

右に付御殿にて御評定の義これあり候由にて、御奉行様にも会所へ御出勤これ無し。右は、歎願の義これある由にて、西国大名御所へ押し寄せ居り候由なり」

「西国大名御所に押し寄せ」とは、おそらく十二月九日の王政復古宣言の際、薩摩・安芸などの兵が御所を固めたことであろう。反発した会津・桑名等の兵が慶喜のいる二条城に集まり一触即発の状況になった。その状況を知らせるべく樽井氏が早馬で帰藩したのであろう。御殿内での「評定」で藩としての対処を審議したのであろうが、内容はわからない。

やがて鳥羽伏見の戦いで新政府側の勝利が伝わると、西日本の諸藩は藩内の議論を統一し新政府側に立つ意思をはっきりと表示していった。次に、慶応四年の公私用日記帳をみてみよう。

(一) 押しよせる維新の波

一月二日「大殿様御不快に付御名代として若殿様御出に相成り……」

七日「去る三日より引続き京都大變の義(中略)、安志藩・林田藩も上京仰せ付けられ(中略)当藩も何時御出陣の程もはかりがたく、人足手当致し置き候様仰せ出され……直ちに村

々へ人足五人を申付けおき候」

藩主忠鄰も跡継ぎの忠明（ただあきら・肥前守）も正月には在所山崎にいた。しかし七日には鳥羽伏見の戦いの情報も伝わり、人足やワラジの用意を始めている。

一月十日「今日人足上京のためお供に出るはずなりしが、昨日延引申し来たりしなり。会津・一橋公も一旦江戸表に引き取り帰られしと也：」

十二日「三日月藩主御通行につき：領分境へ罷り出、名刺を御かご脇へ渡す」

十三日「殿様（来たる十六日）御上京につき、人足百三十人申し付けられ：（中略）：右につき金子千両、郷中へ御借り上げ御頼これあり、俄に相談の義：各村庄屋、明日五ツ時郷会所へ出頭候よう触れる」

十六日「殿様御発駕に付：御見送りに舟元へ：」

十七日「夜前に三日月藩の早飛脚三度通り、日に夜に因州・雲州・石州・浜田等、早飛脚は掛け声にて通行、実に世上不穩の情あり」

一月十六日、藩主忠鄰は京都へ出発した。人足百三十人、御用金千両の依頼が郷中にあり、庄氏はその手配に大変のようで、あわただしさが伝わってくる。

『維新史料綱要』によれば忠鄰は一月二十日に京都に着き、二月四日には他の大名と連名で孝明天皇陵参拝を朝廷に願い出、十日に許可されている。このことから、この段階で明確に新政府に

恭順の意思表示をしたといえる。ちなみに、三日月藩主は十八日、龍野藩主は廿三日に京都に着いている。平素は牛馬か旅人しか通らない道を、十七日には鳥取や島根方面の藩の早飛脚が通り、まさに「世上不穩」の様子だったことがうかがえる。

尚、忠鄰は病気のため二月十一日に帰藩を願い出、廿八日に許可されている。彼が山崎に帰り着いたのは三月八日で、庄家日記には「殿様御着座に付、例の通り舟元へ御出迎え：」と書かれている。

現代と違い、多数の武士が移動する際は相応の人足が必要であった。このように、武家側の記録はなくても村方文書に人足動員の記録が残る場合がある。（人足動員なくして多くの武家集団が動くことはないといえる。）

(三) 新政府の浸透

一月十八日「初会所につき三人とも出頭候処、備前藩の御使者のよし：にわかには町会所は閉会相成る。しかしながら村々御高札に公儀よりとあるを張紙にて取消候様申し付けられ、直ちに村々に達し：」

備前藩の使者が来て何かの急用ができ、この日の会合はなくなったが、使者の一番の用事は何であったかはわからない。高札とはお触れを知らせる立て札である。その村々の高札の「公儀」という文字を張り紙で隠せとは、隅々にいきわたった徳川政権の痕跡をまさに否定しようとしたのだろう。また、誰がどう負担したのか、二月一日の条には「御用金百五十両相納める」とある。

(この年の暮れ十二月八日の条をみると、一月の御用金千両はこの日に返されている。)

二月十五日「上方かねて大變の処、是まで將軍職を勤められおり候一橋公、去る冬退職出願致され候の処、御聞届け相成り、猶又天朝を欺き候次第もこれある哉の趣にて、土地人民御召上げに相成、一橋公御追討仰せだされ候、以来は天朝の御政事に相成り：(天皇中心政府の)御書き付けを村々御高札場に張置き候様、申しわたされ一枚ずつ御渡しに相成り、承知印形お取りなされ候につき、今日村々役人残らず出頭、実に維新の始めなり」

徳川慶喜は將軍職を辞職したが、維新政府から追討令を出された。このたび天朝(天皇中心)の政府になったことを示す書付を、村々の高札場に張り出すよう指示があった。長い引用だが、この日の文章は政治権力の交代を簡潔にまとめている。そして新政府は確実にそれを地方まで浸透させようとしていることがわかる。

また、『三日月町史』三卷一五頁には、青木村の山内家の記録から、「二月十八日、芸備の出役人、宍粟郡庄屋山崎へ御呼寄せ、箇条書読渡：」との引用がある。庄家の日記にも、同日の条に「御料所村々を今日町会所へお呼び出し相成り候：」とだけ書かれており、広島藩・備前藩の役人が新政府の方針を伝えるに来たことがうかがえる。

三月十二日「京都にて役人の内へ加えるべく、高一万石に付一人の割合、学力等の有る人を選びて出る事のよし：」

新政府は一月半ばに各藩から職員を集めた。「貢士(こうし)」と呼ばれたが、立花次郎左衛門が派遣されたようである。新政府と各藩のパイプ役になったようだ。

翌十二日には、山陰道鎮撫総督の西園寺一行が十三日夜に新宮の千本宿に泊まるので、「人足三千のうち二百人ばかり当領分より差出てくれたき旨」林田藩より依頼があった。

鎮撫総督西園寺公望は薩長中心の兵とともに山陰道を松江まで進み、諸藩を新政府に服従させたのち津山・佐用をへて帰る途中、新宮の千本村で宿泊した。このことは近隣の町史に書かれている。一行の人数は市史・町史により違いが五百人はこえていたようで、その世話に近隣の藩から多数の藩士や人足がかり出され、大きな負担になったようだ。『新宮町史』史料編一には、西園寺一行の宿泊の費用で疲弊した千本村が龍野藩に出した支援の嘆願書がのっている。山崎藩の村々から出した人足は、西園寺一行を嘴崎まで送り十五日に帰っている。

(『上月町史』三三三頁、『三日月町史』七卷十六頁、『龍野市史』二卷五五六頁)

そののち庄家の日記からは政治関係の記事は少なくなる。

(四) 明治元年の暮れ

十一月廿三日「山内謙治氏、三日月藩の奥羽出陣につき、軍医にて出張中なりしが、さる廿一日、乃井野へ帰国の旨通知につき、夜半は欲びに行く」

会津はじめ東北諸藩および越後の諸藩に対する戦闘には、三日

月藩も六月中旬に従軍した。新潟・庄内を転戦したのち十一月二十二日に帰着した。『三日月町史3巻』によれば、当時三日月藩領であった青木村の豪農山内氏は医師として従軍した。山内氏と親戚の庄氏は、無事帰国の祝いに駆けつけたのであろう。『兵庫県史』史料編幕末維新(一)に記載の『森俊滋家記』では、三日月藩は六月に隊長以下二十六人を差し出して出している。

十二月廿九日「春以来世上一般大變にて御用多く困り入り候

えども、まず無事に暮れて目出度し」

大庄屋としても大變な一年だったようだ。しかし、おおきな権力の変動にかかわらず、地方の人々の生活は変わることなくおこなわれていたようである。

(以下次号へ)

神谷ばなし(二)

森本 一一一

さあ、みんな来なさい。

おじいさんが 神谷の昔話をしますよ。前号では第一話から第五話までお話ししました。今回は第六話から始めます。

第六話 寺谷悲話(大部さんの神社記より)

奈良の都から、長岡を経て、京都へ都を移されたのは桓武天皇

です。その天皇の弟に早良(さわら)親王と申される方がありました。『咲く花の匂うが如く』と謳われた・七代七十余年の奈良の地から、都を移されると云うのだから、賛成・反対と大變で大きな政争がありました。

その一つに、時の権力者・藤原種継暗殺事件と云うのがありました。これを調べていると、皇弟・早良親王も、関係されているということになりました。天皇は大變にお怒りになり、親王を乙訓(おつき)寺に幽閉されたのですが、親王は事件との関係を否定され、御母・新笠姫の実家・播磨国高野(家)の里(宍粟郡伊沢地区)に逃れて来られました。しかし、そこにも居られず、「うば」を連れて、「都がなる」に隣する・寺谷に隠れられました。けれども、そこも知られ、帝は大變お怒りになり、淡路に流罪とされました。やむなく親王は寺谷を下りられたのですが、あちらこちらと逃げ、食べるものとて充分になくて体をこわし、衰弱されていたので、特別に柔らかい車をつくってそれに乗せ、五十波(いかば)の船場へ向かいました。その途中には、高瀬のほろろ池・という水場があり、そこは皆で車を持ち上げて渡しました。この悲しい状況は長く子供のテマリ歌に残されています。

「あんがりさんがり、ぴよぴよ車がここ通る。ここは高瀬のほろろ池、ほろろともたげて渡いた」(と歌って、次の子供に、空中にほり上げたマリを渡す間に交代する)

また、こんな民謡もあります。「野々上 山家で、岸田は里じや、五十波(いかば) 都で舟がつく」このように病身をいたわり

ながら、寺谷を下り、野々上・岸田・五十波の舟場へ向かわれたのですが、ほろろ池から半丁（50米）ばかり西へ寄った、カキアガリ”というところまで来られたところで、とうとう亡くなられました。それでここは、親王が神あがりされた所だと伝え、ここだけは昔から耕さずに草地のままに残されているのです。ここから一丁ばかりで舟場に着きますが、親王の亡骸は、ここで舟に乗せ、一里ばかり川下の山崎にお上げしてお葬儀を行いました。喪屋の跡には祠を建ててお祀りしました。これが今もある、やま

だの総道（そうどう）神社でオソドサン（崇道さん）と呼んでいます。早良親王のお母皇は高野の里の出でありますので、その中野のお宮の裏山に御陵を作って埋葬したのです。けれども、この御陵も帝の御心に召さず、壊して、淡路へうつされました。

ところで、それから次々と都で異変や災害が続きました。人々はそれを無実の罪で流罪された親王のたたりであると言いはじめました。このため帝は親王の罪をなくし、更に諡（おくりな）をして崇道天皇と崇められることになりました。この早良親王が神谷の藤が森さんにお祭りされているのです。

第七話 藤が森さん

毎年四月下旬、山に藤の花がながく垂れ、紫の花から甘い匂いの香る頃、藤が森の春祭りがあります。

子供達は、豆ご飯のおにぎりや、お菓子を接待してもらうのを楽しみにお参りします。大人達は、御神事のあと、お酒が出て賑

やかに“直らい”をします。

藤が森神社は、明治四年の神社改めによると、ご祭神は舍人親王と出ています。舍人親王は奈良時代の初め、日本書紀という古い歴史の本を作られた偉いかたで、亡くなられてから崇道尽啓天皇と諡され、山城の国の藤が森にお祀りされています。

そこで神谷の藤が森さんも舍人親王をお祀りしているのだという、話がわかりますが、ではどうして舍人親王をこの神谷にお迎えたのだろうか。

これについて、大部彦吉さんは、その神社記のなかで大変興味深い事を言っています。

「藤ヶ森社、これも神体分明ならざるや、前に早良親王を神体として崇道天皇とあがめ奉るとかや。近代は改めて崇道尽啓天皇と、あがめ祭れりとかや。」これを要約すると、藤ヶ森さんの御神体ははつきりしなかつたためか、前には早良親王を崇道天皇と申しあげてお祭りしていたが、この頃は、それを改めて崇道尽啓天皇（舍人親王）としている。ということである。となります。

これを見て分かるように、崇道天皇と贈り名された方が二人あり、時代もあまり変わらず、よく混同するので、はじめ早良親王をお祀りしていたのが、近頃になって舍人親王にあらためられたんだ ということになります。

そういわれると、舍人親王と神谷との関係は伝承もなくわかりませんが、早良親王は寺谷に逃げて来られ、見つかって淡路へ送られることになり、岸田の“かきあがり”で亡くなられた崇道天

皇です。無実の罪で、神谷の寺谷に逃げて来られた早良親王をお気の毒に思い、お祀りしているのだとするとよく話が合います。

ところで今、私たちは藤が森社を、藤が森のお稲荷さんと呼んでいる。なぜだろう。明治四十年、無格社合祀願がだされ、産土の八岡神社に荒神さんや、山神さんと共に藤が森さんも合祀になりました。

お社はなくなり、そこにあつた大きなムクの木はきられて、餅つき臼になりました。それから二十年あまり、お社の隣の立花さんの家に不幸が続くので、占ってもらおうと藤が森さんが『八岡は窮屈だ、はやく立花へ帰りたい。』とでました。そこで、立花さんの発願によつて、昭和七年四月二十九日、以前の地にお社をたてお帰りねがったのですが、その時、お稲荷さんを勧請されたので藤が森のお稲荷さんといわれるようになったのです。

当時の寄進額が消えかかっていますが、それによつて立花さんがどれだけ力を尽くされたかがよくわかります。

それ以来、お祭りの後の“直らい”のお宿は立花さん宅となり、お社の前の釜田さん、後ろの森本（私の家）などが中心になり、そして、隣保のみなさんで守り、伝えて来たお社なんですよ。これからも皆で大切にお祭りしてくださいね。

第八話 丁の坪（条里の田）

神谷の家が集まっている高台を降りると、小学校があります。その東に南北にまっすぐに伸びる県道が通っています。その西側

は、圃場整備された広い田がきつちりと並んでいます。河東中部の“米どころ”です。

学校の付近を戒現行（かいげんや）といい、そこから南へ五百米ばかり下がった付近を丁の坪（ちやうのつぼ）といいます。丁の坪とはおもしろい名ですね。

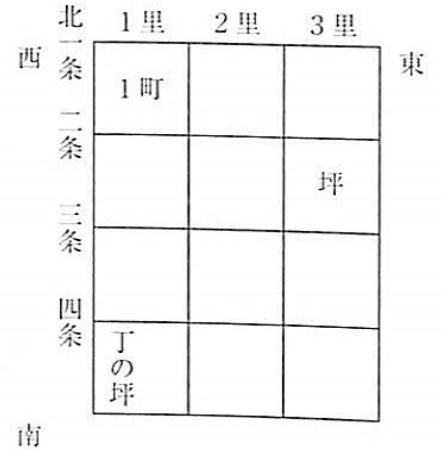
さあこれから、“丁の坪ばなし”を始めます。すこしややこしくて、むずかしいかもしれませんが、しっかり聞いて下さい。

今から千三百年ばかり前、正確に言うると六四五年、天智天皇は中大兄皇子（なかのおうえのおうじ）らと共に大化の改新という新しい体制を作られました。この改新のねらいは、唐の国の制度にならつて、人も田も全部国のものとし、六才以上の男子には皆、田を二反与え、女子はその三分の二として平等に耕作させ、その代わり、租・庸・調などの税を負担させ、その者が死ぬとその田は公に返させるという仕組みです。これを班田収授法といいます。これをするためには、きつちりとした田を作る必要があります。田の広さがまちまちでは分けられませんものね。そこで新しく考えだされたのが条里制という田の作り方です。

ではその田の作り方を説明しましょう。

広い土地の中にまず南北の線をとります。それに直角の東西線をひきます。次にその両方の線を一町（約百米あまり）毎に印をつけそれを線で結ぶと、一辺が一町の正方形ができますね。その様子を図にしますと別図のようになります。

南北を切ったのを条といい、東西の線を里に切りますので条里



け方も決まっています。

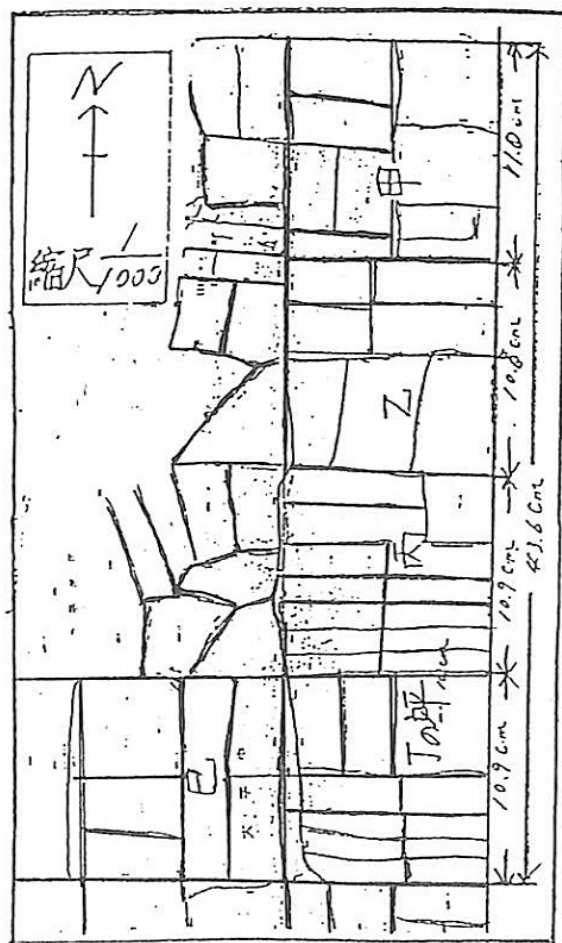
まず、坪の型紙をつくります。それを真二つにおります。すると、五反の二つの田になります。更にそれを二つに折ると二、五反の田が四枚できますね、この方法を半分・半分と折っていくので半折式といいます。



次は二つ折りにして五反にした田を長い辺によって二つに折ると、細長い田が四つできます。この方法を長地式と呼びます。一つの大きさは二、五反ですまた三つ折りにしても良いわけです。長々と説明しました。条里制の田作り法をしっかりと頭にいられておいてください。

というのです。そして出来た一町四方の正方形を坪といいます。「丁の坪」と書いた所は四条一里で坪と入れた所は二条三里の坪ですね。ところがこの坪の面積は一町歩あまりもあって広すぎますので、小さくいくつかに分ける必要があります。その分

さて、戒現行から、丁の坪付近の条里の田を見て行きたいのですが、残念ながら今の田ではそれがわかりません。



それは、昭和50年代に、岸田の北から南へ南へとそれまでの田をつぶし、基盤整備をしてみたからです。昔の田を見ようとすれば整備前の地図を見なければなりません。町役場の農業土木課でもらってきた地図を出しますのでよく見てみてください。

図の右手には県道が南北に真っすぐに走っています。それから西へ百九米ごとに直角に線が通っています。その線が北で百七米のところを大溝が流れて田を区切り一町歩余りの正方形に区画されている様子がはっきりとわかりますね。

南北線に比べて東西線が二、四米短いのは、明治の終わりに道ができ昭和の始めに幅を拡げて県道に取りこんだためなんです。

う。さあ、先程の条里の田作り法を思い出して地図を見て下さい。い。

仮に「巴」と名づけた田は見本のような半折式の田ですね。丁の坪は、半切線の南側は長地式・北側は半折式です。他の田も見てください、どれもきっちり半折線をつけ、その後、長地式や半折式に作っています。これは地形の高低などによって作業のしやすいように、また水の当たりやすいように考えて作られているのです。ここで少し私が勘違いをしていた話をします。

山崎町史八十一ページには中比地の「市の坪地籍図」がでています。それで見ると一区画がきっちり百米の正方形になっています。丁の坪の百九米はおかしいと思っていたのですが、平成五年五月二十八日の神戸新聞の十三面に奈良県箸尾遺跡で一辺の長さが百九米であることが出ており丁の坪と一致するのでうれしくなりました。ではこの条里はいつ作られたのか。箸尾遺跡では、時代は奈良から平安初期まで下がるのではないかと書かれていたので作りの同じここでもそのころに作られたのだろうか。私たちの里は石作里（いしづくりのさと）と言われますがこれは風土記では『石作里・本の名は伊和、土は下の中・石作りと名付くる故は、石作首（おびと）等・この村に居る・故に庚午年石作里と為す』（庚午年は天智天皇九年・六七〇年）とあり、一三〇〇年も昔に土木工事の専門家集団である石作首がこの地に入り作ったのだろうか。

（前の図で巴の所を掘って遺跡調査がなされたが柱や、炉などの

跡や、土器などから奈良時代より古いあとがでている。）千三百年も昔に作られた田がそのままの姿で昭和五十年代まで遺されていたのである。

第九話 頼朝の恩返し

皆さんは歴史で、源平の戦いのことを勉強しましたね。そして最後に、源頼朝が平氏を滅ぼしてしまい、鎌倉に幕府を築いて武士の世になったことを。その頼朝の一代記を書いた、吾妻鏡（あずまかみ）という本の中に、私たちの村・石作庄の名が出てくるのです。頼朝といえは冷酷無情といわれていますが、その頼朝が幼い頃に命を助けられた池の禅尼（いけのぜんに）の恩に報い、禅尼の子・池の大納言頼盛の領地を没収からはずしてやったという話です。

少し長くなりますが、心温まるすばらしい美談です。頼朝の父・義朝は平治の乱に破れ、領国の板東へ逃げようとしたのですが、尾張（愛知県）まで来たところで長田忠致（おさだただむね）と言う者に騙し討ちにされてしまうのです。その時、頼朝十三歳、戦いに敗れたことを知って、父義朝たちの後を追って関東へ逃れようとしたのですが、その列を見失い、道に迷っているところを尾張守・平頼盛の家に捕らわれ、京都に連れ戻されてきました。これを知った平清盛は、敵将・義朝の三男である頼朝を生かしておくわけにはいかないと、首を打ち、六条河原に晒そうとしたのです。その事を聞いた、清盛の義理の母になる・池の禅

尼は、幼い頼朝があまりにもあわれだと、その助命をしたのです。清盛は、初め、『母御前などが、お口を出されることではありません』と断ったのですが、『和殿（あなた）も弓取りの子ではありませんか、今日の人の身、明日の我が身』と嘆かれては、さすがの清盛も母の頼みを断りきれず、ついにその命を助け、伊豆へ流罪ということにしたのです。またこの時、義経も助けられ、牛若丸といった義経は鞍馬山へ預けられました。平治の乱のあとは平家一門の天下となり、清盛は従一位太政大臣となって人臣を極め、一門ごとごとく、高位・高職につき『平家にあらざれば人でなし』といわれるまでの栄華をきわめました。

さて、私たちの神河地区・石作里（いしづくりのさと）は、この頃、播磨の守であった平清盛の領地でありましたが、平家の天下となると播磨守をついだ弟の頼盛の荘園となりました。朝日が早く、夕日が長く、揖保川の水利に恵まれた河東中部の、糸里の美田はおいしい米や麦を豊に稔らせたことでしょう。

しかし：『祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり沙羅双樹の花の色、勢者必衰のことわりを表す。おごれる人久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もついには滅びぬ、偏（ひと）に風の前の塵に同じ。』おごれる平氏も久しからず、歳月逝くこと早く二十一年。伊豆・蛭ヶ島に流された頼朝は三十五歳、鞍馬山を抜け、奥州平泉に囲われた義経二十三歳か、遂に源氏の立つ時がきた。

木曾の冠者・義仲、まず北陸路を制し京に入り、平氏を西海に

追い落としましたが、同族の争いとなり、続いて入った義経らの鎌倉勢は宇治川の先陣争いをしながら、同じ源氏義仲を瀬田の深田に追い詰めて討ち死にさせ、続いて神戸・福原の平氏を、鴨越の逆落とし、須磨の戦いなどで、再び海に追うと頼朝は、平氏の領地を没収してしまいました。昨日の栄華も今日は夢、宮廷に入った女官たちも家元が潰れては浮き草に同じく縁を頼って落ちてゆきました。まことに、あわれというも言葉がありません。

この時にあたり頼朝は、かつて平の頼盛の母、池の禪尼に命を助けられた恩徳に報いるため、頼盛の家領三十四箇所の没収を取り消しました。このうち石作庄（播磨）六人部庄（丹波）など十箇所は、かつて八条院領であったことよって没収をまぬがれたのです。この八条院領というのは、鳥羽上皇と美福門院得子との間に生まれた皇女・八条院章子内親王の所領で上皇から譲られたものである。だから、石作庄は十二世紀の前半には既に院領荘園になっていたようであり、古くからの荘園である（山崎町史より）。これは、（第八話）糸里制の話のところでも述べたように、この河東の田畑が古くから開け、豊かな、すばらしい所柄であったことを物語る証拠であろう。八条院の荘園になると、都から荘司という役人が下って来て、華やかな都ぶりを誇ったことでしょう。美しい平家の血を引く内親王さまを領主に仰ぎ、人々の生活も平安であったことでしょう…。

本当に、心温まる美しい話ですね…。

おしまい

江戸時代の播磨国鋳物師

— 姫路の鋳物師の現地調査 —

片山 昭 悟

一、はじめに

宍粟市山崎町金谷は鋳物師の村で、江戸時代に宍粟郡金屋鋳物師長谷川氏は、宍粟市内で多くの梵鐘や半鐘を製作している。

長谷川氏の梵鐘や半鐘は、川戸や船元、中野や小茅野、百千家満、安賀などに現存している。

江戸時代の宍粟郡金屋鋳物師長谷川氏については、「山崎郷土会報」にこれまで平成九年に「長谷川孫兵衛・五郎兵衛製作による梵鐘・半鐘集成」など拙稿を発表し、宍粟市歴史資料館の歴史講座で「梵鐘と鋳物師」の話しをさせていただいている。

今回なぜ私は姫路の鋳物師について現地調査したのか、一つは播磨国の宍粟郡で金屋鋳物師の長谷川氏が居ながら姫路鋳物師京口住の小野氏や野里の瀬川氏製作の梵鐘や喚鐘がみられることからである。

もう一つは、播磨国鋳物師の中心的な野里鋳物師の芥田五郎右衛門の名前が町名になっている五郎右衛門邸（やしき）の現地と鋳物師が居たとされる金屋町の現地を自分の目で確かめたいとの思いからで、京口住の小野氏は、名畑観音堂の梵鐘を小野市兵衛が製作している。明源寺の喚鐘も小野六大夫であり、姫路の鋳物師は宍粟の梵鐘を考えるうえで重要なことから、平成二十一年四

月二十九日に野里鋳物師の野里や京口町の現地調査を行ったので、調査の一端を紹介させていただきます。

二、播磨の鋳物師

播磨は平安時代後期頃から鋳物師の居住地として知られる。

『長秋記』に「播磨鋳師」とあり、『新猿楽記』に「播磨針」、「播磨鍋」、「蔭涼軒日録」には「野里鍋・埜（野）里小鍋」が特産品として知られる。

野里は播磨国鋳物師の中心的存在で多くの鍋や釜などの日用雑器を製作している。野里鋳物師の芥田氏は、代々芥田五郎右衛門を名乗っていて、播磨国惣官職として知られ、京都方広寺の鐘を造っている。

三、姫路野里の五郎右衛門邸と金屋町の現地調査

姫路へ午前十一時三十分に着後、バスに乗り野里門で降りて、今回の目的である播磨国鋳物師芥田五郎右衛門の地名である五郎右衛門邸を探していると井置君という小学生がいて訪ねると、電柱に「五郎右衛門邸」と表示されていた。

五郎右衛門邸は扇状の広大な地形である。東には姫路城の外壕跡で、その東は同心町である。その後、鋳物師がいたとされる金屋町を探す。東南方向へ行くと南が金屋町である。その南には八木町がある。野里鋳物師は、地形的にみてこの地が適していたのではないかと思われる。以上五郎右衛門邸と金屋町の位置がほぼ

同地域で確認することができた。

金屋町を後に、鍛冶町から寺町、大野町、慶雲寺に着く。慶雲寺は鐘樓を修理されているところである。野里は五月一日から十日にかけて、道筋に五月人形を飾られる。

その後、威徳寺町、梅ヶ枝町を通り、明珍火箸で知られる明珍宅へ行く。明珍さんが一生懸命仕事をされていたのが印象に残った。梅ヶ枝町には日吉神社があり野里の先端に位置する。

今回の現地調査で芥田氏の自宅は五郎右衛門邸にあるものと思っていたが、寺町におられることが確認できた。

四、姫路の野里鋳物師に関連する地名

姫路の野里鋳物師に関連する地名を紹介します。

①五郎右衛門邸（やしき） 姫路城北東の外曲輪に位置する武家町。鋳物師の棟梁であった芥田五郎右衛門の所有地であったところから名付けられている。

播磨国鋳物師の代表である芥田五郎右衛門は、播磨の鋳物師の棟梁で、永禄十一年（一五六八）に赤松義祐が芥田五郎右衛門に播磨國中鋳物師惣管職を安堵したもので、播磨国の鋳物師統括を許可した記録が残る。

芥田五郎右衛門は脇棟梁として播磨の鋳物師一六七人を連れて慶長十九年（一六一四）京都の方広寺大仏殿の鐘を鋳造している。方広寺の鐘銘には「国家安康 君臣豊楽」がみえる。

②金屋町（姫路市金屋町） 姫路城から東の外曲輪に位置する町

人町。八木町の北にある南北の町筋。町名は、金屋（鋳物師）がいたことによるという。

③鍛冶町（姫路市鍛冶町） 姫路城から北東の外曲輪に位置する町人町。町名は武器や農具を生産する鍛冶職人が住んでいた。野里村古地図に「野里之内かち町」とある。

④大野町（姫路市大野町） 「和名抄」に飾磨郡大野郷。中世は野里村で早くから鋳物師が住み、野里村古地図に「野里之内いもし町」とある。大野町には鍋に関連する「鍋市」という店がある。参考文献『兵庫県の地名』平凡社一九九九

五、宍粟市における姫路京口住の鋳物師

宍粟市における姫路京口住の鋳物師は、小野六大夫、小野市兵衛尉藤原家信、小野太郎左衛門尉藤原正家が知られる。

小野六大夫は、山崎の明願寺の喚鐘を製作している。この鐘は現存している。享保六年（一七二一）。

小野市兵衛尉藤原家信は、一宮町須行名の名畑観音堂の梵鐘を製作している。この鐘は宍粟市指定歴史資料で現存している。万治三年（一六六〇）初鋳、寛文六年（一六六六）鋳直、貞享二年（一六八五）再鋳。新田義貞の発願とされる。

小野太郎左衛門尉藤原正家は、波賀町安賀の満願寺梵鐘を製作している。鐘銘から正徳二年（一七一二）とされる。

小野太郎左衛門尉藤原正家は、記録によると山崎町寺町の大雲寺の梵鐘を製作している。元禄七年（一六九四）初鋳、享保五年

(一七二〇) 再鑄とされる。

六、姫路京口住鑄物師小野氏の現地調査

平成二十一年四月二十九日に姫路市京口町で京口住小野六大夫について現地調査を行った。その概要を報告します。

姫路京口住の鑄物師小野氏の位置を確認しておきたいと思った。市営バスで大手前を午後三時三分発に乗り播但線の京口駅前に行く。京口町は姫路城から東へ約一キロのところ京口駅前の小さな公園に旧鑄物師町跡の石碑があり、鑄物師町の旧町名が記録されている。それによると鑄物師町は京口町に変更されている。現在は京口町でかつては鑄物師町であったところである。

京口住小野氏について、京口駅前の小野酒店で聞き取り調査を行った。小野酒店は四番地で角のところ、一番地は東西道路北側で小野さんある。かつて京口には鑄物師が三軒あったとされる。小野氏は代々鑄物師であり、鑄物師町跡の町名由来記念碑を建てられたとのこと。小野氏は野里の慶雲寺の檀家で、慶雲寺は元天台宗であったが臨済宗妙心寺派で、現在鐘楼を修理されている。

旧鑄物師町跡の記録について紹介すると、次のようである。

「町名由来記念碑」

昭和五十六年二月姫路復興土地区画整理事業(第二工区)の完了と共に我等の鑄物師町が京口町と改稱して昭和五十七年四月一日より発足したものである。

これにより由緒ある旧町名を永久保存したく旧町民総意でここに建設したしだいである。

王朝の頃から一帯を津田村といい、其の中の神谷(屋)の北裏に位置し、吹屋といった。

古く佐用の砂鉄から鉄を造り播磨鍋・針を京都で売出し非常に名高かったのである。

天文七年(一五三八)藤原弁随統領の鑄場を芥田家久が買収して野里に移したのでその後は野里が鍋、梵鐘、灯籠、塩釜、鋤、鍬等の鉄鑄物製品の中心的存在となったのであるが、宝暦五年(一七五六)総町諸事覚えの中の諸職人調べによっても当町に鑄物師が十一名住みついたとあり芥田氏の代名詞で姫路城天守閣及び各門に使用されている角釘鋏、其の他の金具の一部使用が明確になっているのである。

第二次世界大戦の最中我々は防空壕を各戸に地下二メートル位の深さで掘ったものである。然るに鑄場であったのだろうか。地下一メートル、一メートル二〇厘位の処に厚さ十厘位の茶色に変色した鉄或は鑄物の帯状の層が東西に走っている事を確認したものである。」と鑄物師町について詳しく書いてある。

『兵庫県の地名』によると、鑄物師町(姫路市京口町)

姫路城東にある外京口門の東、西神屋町の北に位置する町人町。野里の鑄物師町に対して、京口鑄物師町とか神谷鑄物師町とも称した。鑄物師の棟梁の居住地といわれる。

慶長以前は津田村とよばれていた。播磨国総社の銅鐘は、永正

三年（一五〇六）津田村の鋳物師大工津田村内記石根丸、小工内記四郎左衛門が製作している。

七、まとめ

今回の野里や京口鋳物師の現地調査でわかったことをまとめること、野里鋳物師芥田五郎右衛門邸（やしき）の現地を確認できたこと、金屋町、鍛冶町、大野町、寺町、威徳寺町、梅ヶ枝町の明珍さんの現地を確認できた。京口の鋳物師町と小野氏の聞き取り調査と現地調査ができたこと、小野市兵衛の子孫が小野六大夫であることが今回の調査でわかったことである。

宍粟市における姫路の鋳物師製作による小野氏以外の梵鐘は、野里の瀬川安右衛門は、寛政十二年（一八〇〇）波賀町上野の井の谷半鐘がある。姫路龍野町三丁目の油屋（あぶらや）岩蔵は、文政十二年（一八二九）の一宮町百千家満の常楽寺喚鐘と天保十五年（一八四四）の千種町西山の仙光寺喚鐘がある。これらの寺院は姫路とつながりがあるものと思われる。

このほか宍粟市には金屋鋳物師長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛が居ながら上郡高田住の中村弥右衛門や中井幸右衛門、大坂の菅原安欲、岸本七右衛門、京三条釜座和田信濃や三条住国松近江、室町出羽宗味などの梵鐘や喚鐘が現存している。

「鋳物師座法掟」は、一国一郡で鋳物師は一つであるとされるが、福知の大徳寺喚鐘や春安の願行寺喚鐘は、京三条釜座和田信濃の製作である。金屋鋳物師長谷川孫兵衛が全国の鋳物師に知ら

れることになったのは、寛政五年（一七九二）三月に播磨国宍粟郡岸田村（一宮町上岸田）において京三条釜座和田吉兵衛と争論になった一件である。

参考資料

太平洋戦争で供出された姫路の鋳物師の明治時代の梵鐘

（故安井俊二氏の調査による）

- ①青蓮寺梵鐘 明治十年（一八七七）鋳物師姫路尾上久三郎
- ②明源寺梵鐘 明治十二年（一八七九）職工姫路野里保城忠平
- ③光泉寺梵鐘 明治三十二年（一八九九）姫路市博労町

鋳造人福井梅吉

彫刻人当町岡田與一

- ④随陽寺梵鐘 明治四十二年（一九〇九）

鋳造人龍野町中村仁蔵

鋳物師大阪高津住

今村久兵衛藤原清久

- ⑤大雲寺梵鐘 江戸時代享保五年

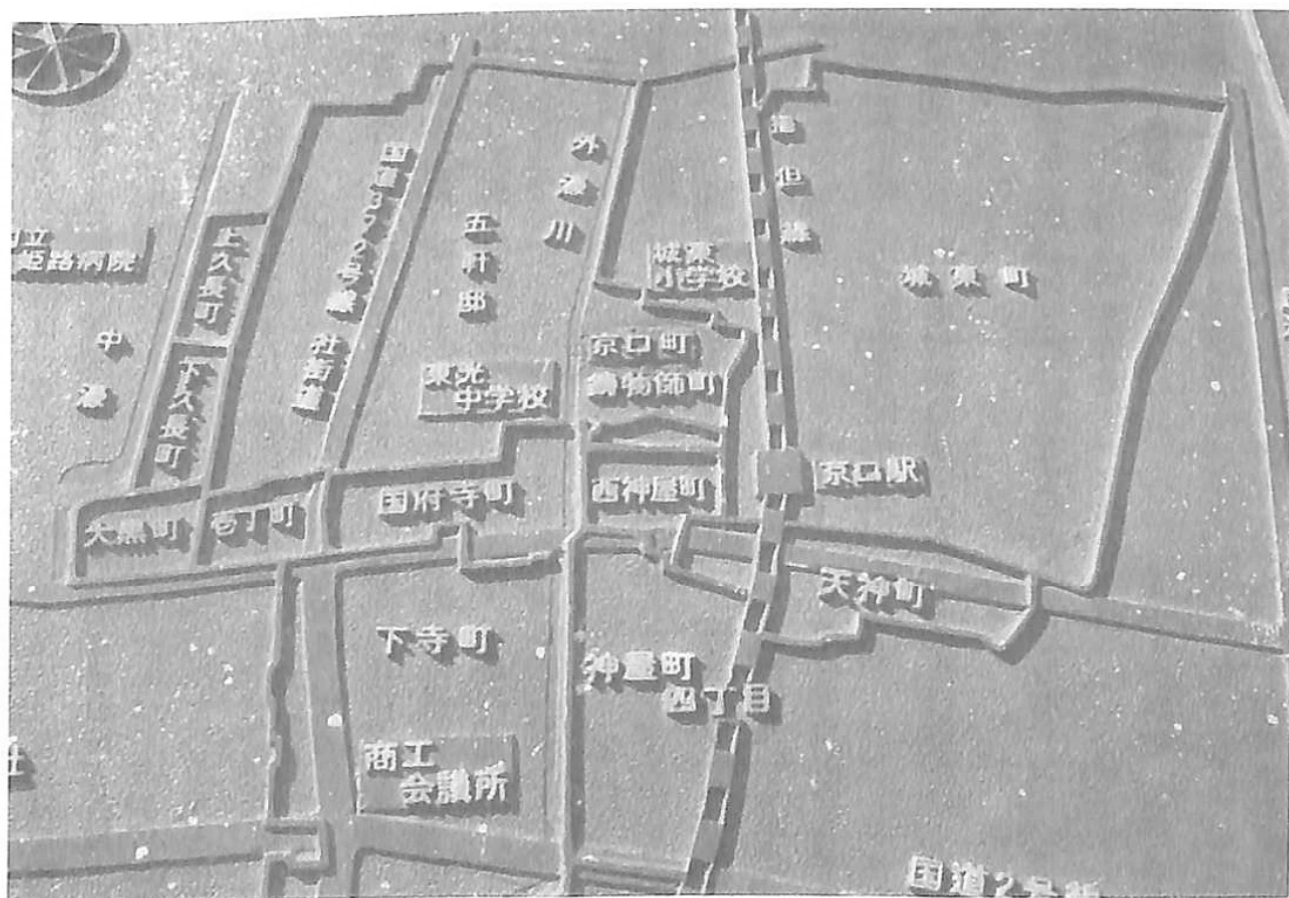
冶工播州姫路京口小野太郎佐衛門尉藤原正家

参考文献『兵庫県の地名』平凡社一九九九

『一宮町史』一宮町一九八五



五郎右衛門邸



京口町・鑄物師町

塩山の歴史

谷井 伴夫

塩山を調べる前に、まず土万（ひじま）地区から述べることにしましょう。私たちの住んでいる土万地区はたいへん古い時代より存在していたことが各種の文献に出ています。

平城京の奈良期（七一〇～七八〇年）のときに既に土万郷が出ています。平城京時代とは日本最初のお金・和同開珎（七〇八年）が铸造された時代です。また、『古事記』や『風土記』が編纂された時でもあります。『風土記』には「宍禾郡」七里のひとつ「柏野里」のうちに「土間村」とあるそうです。

土万の地名は、神衣（かみむそ）が土（地面）に着いたことによると伝えられています。平城京のあった跡地の土の中より出てきた木簡に「播磨国宍粟郡余戸里丸部〇〇」と見える余戸里は、風土記の土間村に当たるとする説が有力だそうです。この里には丸部氏が居住していたそうで、丸部とは考昭天皇の子孫であるとのこと。

また、鎌倉期から室町期に見える村名に「土万村」があり、宍粟郡佐用荘のうちになっているそうです。建長二年（一二五〇）十一月九條道家処分状の中には、播磨国作用庄内、東庄、西庄、本位田、新位田、豊福村、江川村、赤松村、千草村、土万村とあるそうです。このように色々と土万地区は長い年代にわたり時代

を乗り越えて現代の土万地区があると思います。江戸期には、土万地区は六つに分割した集落であり、明治十二年に今の四自治会になりました。

塩山について述べてみましょう。「塩山」という地名は江戸時代の初期よりあったようで、その当時は「塩野村」と呼んでいたようで、播磨国宍粟郡塩野村で今の姫路市安富町塩野と二つあったようです。

慶安二年（一六四九）に幕府直轄領となった当時は「三河」と肩書されていて、幕末に西塩野村と称されるようになりました。また、幕府領になったときに塩野村であった一部の銀山が「銀山（ぎんざん）村」と呼ばれるようになり、小村ながら銀や銅、錫を産出したので特に目を掛けたようで村高はわずか十六石余りとのこと。

片方の塩野村は『正保郷帳』（一六四四年頃）では村高三七四石余りで田三三三石、畑一四一石と記録されています。また、『天保郷帳』（一八三〇年代）では三一二石余りと記録されています。その二ヶ村（塩野村・銀山村）が明治十二年に合併して現在の塩山村となっております。

私たちの塩山には、約四五〇年前にあの有名な豊臣秀吉が、中国平定の途中、宍粟の領主であった長水城主の宇野下総守一族が滅亡した折に、宇野一族であった右衛門祐光が塩山城（本名は鳥子城）の城主であったことはあまり知られておりませんが、私たちが子どもの頃より、年寄り達の言い伝えて、赤坂の小学校の辺

りや裏山に城があったので、その辺を「片城」と呼んでいるとのこと承知していました。

また、旧跡として「寺隣保」に「大福寺」というお寺がありました。土万地区全体が門徒だったようで、この寺も天正八年（一五八〇）秀吉軍の攻撃の中でお城と一緒に焼失したとのことです。

銀山の鉾山も今から約五百年前に、時の権力者によって採掘され、塩山村とともに栄える時や、衰える時代を刻んで昭和二十年の夏まで続いてきましたが、現在では廃鉾の跡も見ることができない状態です。

以上が当塩山の地域に残る史跡の紹介ですが、ここには、他地区にない「おしめ祭り」など昔より伝わっている旭鏡相撲、愛宕講や荒神講、お大師講など色々の祭祀やお稲荷さん、お地藏さん、観音様、新四国八十八カ所礼所があります。それぞれ私見や言い伝えを取りまとめ書き留めてみます。

村社松尾神社 塩山宮ノ段にあり、境内約三反弱の敷地。祭神は大山昨命（おおやまのみのこと）山里の神）、素盞鳴命（すさのおのみこと）病氣全快の神）、大山祇命（おおやまづみのみこと）山の神）、経津主命（ふつぬしのみこと）戦の神）の神様がおまつりしてあります。本殿は銅葺流造、三坪一合八勺、拝殿杉皮葺入母屋造七坪九合であった。現在は社務所等の増強しにて大きく変わっているし、屋根も瓦葺である。創建については詳らかではないが、慶長年間の池田三左衛門時代の検地帳で除地とし

て扱われていることでも分かるように、その当時から神地として祀られていたものと思われる。

本殿の創建は安永九年（一七八〇）九月であり、境内神社（若宮神社我々が小宮様と呼んでいる。）は、伊邪那岐命が祭神であります。

松尾神社の祭日は、元旦祭（一月一日）、春の祈願祭（三月十八日）、夏祭（七月九日）、八朔祭（九月（旧暦八月一日）、例祭（秋祭十月十九日）合祇祭（秋の感謝歳十一月十四日）、おしめ祭（旧暦十一月十四日）となっています。

本殿内には塩山地内にあった九社のご神体をお祀りしてあります。神子谷無格社（山神社）、木野見無格社（須賀神社）、平無格社（山神社）、荒神の上の無格社（須賀神社）、東山無格社（大將軍神社）、東山無格社（山神社）加賀須無格社（須賀神社）加賀須無格社（山神社）の九社で明治三十六年四月十四日に合祀された。

松尾神社については、神社庁の明細によると慶長年間池田三左衛門輝政の時代に除地として記録されていたと延宝七年（一六七九）の検地帳にある。本殿の建立は安永九年で「神主茂衛門、春名大進外」と記録されています。なお、本殿内には創建以後の棟札や改修についての年月日を記録した木札が数多くあります。なかでも文化五年（一八〇八）四月に本殿上屋屋根替や大正十一年十一月に社殿模様替をしたことなど、文化、文政、安政、慶応の各時代の神社行事が判る木札もあります。

私たちの子どもの頃から青年時代には、数百年を過ぎた大きな杉・松・ヒノキ等の社叢林があり、境内に入ると荘厳というか自然に我が身を正すような威厳が感じられたものです。境内には廻り舞台もあって、年に一度くらいは村芝居（歌舞伎など）があり、青年団や消防団が村に要望して、芝居を買いに行き、興行となると村の人は前日から座敷づくりや借り物などで、忙しく動き回りました。

その大きな杉の木も台風で倒れたり、老朽で枯れ木が舞台に倒れかかったりしたことで時代の移り変わりにより、舞台の必要性が薄れ、維持管理が困難との理由で舞台の取り壊しと杉の木などの処分を決め、昭和四十三年に改修工事を行いました。数百年も生い茂っていた、しかも神聖なるものと崇め祀っていた神域に手を入れることなので、たくさんの批判もあったし、反対の声も上がりました。当時の総代西嶋元雄氏と副総代兼農会長であった私は、毎日毎晩のように対策を協議しながら、それでも地域の皆さんのご理解とご協力により無事完成させていただき、現在の神域ができ上がりました。それから約三十年が経過し、杉の木立ちも成長し、森らしくなりました。

拝殿前の石の神燈には、「奉納 友延四郎兵衛 年月日寛政十二年申天」とあります。拝殿前の靴脱ぎ石には、□保十四年と刻んであり、創建から推測すると「天保」と見て良いかと考えます。

おしめ祭り 神社の祭日は前述しましたが、他地域にはないおし

め祭りについて書いてみます。このお祭りは塩山村にだけあるもので、いつ頃から始まったかは不明ですが、昔からの言い伝えによりますと、塩山村が全焼したり、天災地変にて悪病の流行や不作が続いたりして、死者が増えたり、村を棄てる農民が出るなど困窮したときに氏神様に助けてもらおうと、各戸から薪を持ち寄り、境内で大焚き火をして村民が祈願をして、夜を明かしたそうです。そのお蔭により村も明るさを取り戻し、病氣も治り、作物も順調に生育してきたので、これを神事として毎年行うようになったとのことです。今でも旧暦の十一月十四日の夜、焚き火をして、その中に祈願のお札を投げ込んで無病息災を念じています。

須賀沢の古墳を調査して

下 村 哲 三

宍粟の地に人々が居住しだしたのは、紀元前五千年前と言われている。須賀沢地区においては、弥生時代にはすでに農耕集団が居住していたことがうかがえます。それは寛政二年（一七九〇）と言いますから、今から二二〇年前になりますが、須賀村の山中から銅鐸が出土したと、また、その付近に横穴式石室を持つ殿様藪古墳と他にも一基の古墳があります。弥生後期といえ

ば三世紀までで、ちょうど卑弥呼の時代と重なります。

その頃にもこの地にも銅鐸を持った勢力の人たちが居たのですね。須賀村の地形をみると、揖保川上流の山崎盆地と林田川上流の安志盆地をつなぐ、古来より重要な道の沿線にあり、宍粟郡の政治経済文化を統べる山崎盆地を一望できる位置にあります。揖保川はこの盆地の東端を南流し、左岸に顕著な段丘を作り、その一部が東方へ入り込んで谷間になっています。須賀沢村は谷間の入口にあたる段丘上にあり、いわゆる、『朝日のたださす、夕陽の日照る場所』と言って良いでしょう。背後には、揖保川に臨んで屹立する愛宕山を起点として、安志峠に伸びてゆく、山丘が連なっています。弥生時代から人たちがこの地に住居を設けたのも当然のことと考えられます。

昭和四〇年代、西日本の内陸部を縦断する高速道路・中国縦貫自動車道の開通によって、価値ある遺物が多少なりとも消失したことでしよう。この地について、特記するような考古学上の研究は行われていないけれど、段丘上に広く弥生時代の遺物散布地があることからみて、須賀銅鐸を輩出した背景を確かめることもできるのではないかと、後の研究に期待しています。

「須賀村の山中より掘獲た」という記述からいって、銅鐸出土地は須賀沢村背後の山丘ということになるが、私は現存する二カ所の古墳の付近ではなからうかと思っている。

私は平成二二年一月に殿様藪古墳のあった現地を歩きました。場所は石造神社の入口石段より中国道の側道に沿って上り、二八

五メートル地点より高速道内へ直角に五メートル入った所です。ここは、江戸時代でいうなら「蟹ガ沢（かにがさわ）村」です。昭和三三年に調査をされていますが、その頃、このあたりは傾斜地の開墾地でした。覆土はなくなっていて、直径約一〇メートル前後の小円墳です。石室の石は比較的小さく粗雑な石が使用されていました。蓋石は一個のみで一時期村内のある家の庭石運ばれていたようですが、今は現地にありません。

伝説によれば、「殿様藪」の由来は以下のようです。安志藩の藩主小笠原侯が元治元年（一八六四）に第一次長州征討に出向くとき、資金調達のためこの土地を得たのでその呼び名がついたとのこと。

出土品は、須恵器蓋付杯六個、他破片多数、金耳飾五個、鉄製直刀二本、鉄鏃四個、銀耳飾一個、釘状鉄器一個ほかに鉄片が出ています。

殿様藪古墳は昭和五十二年に中国自動車道工事のため、埋没してしまいました。

そのほかに須賀沢一号墳は円墳で盗掘を免れて現存しています。同じく二号墳は横穴式石室で盗掘されています。

当地方における異常気象

深川 定義

地球温暖化など、異常気象が問題になるこの頃だが、この地方における過去の異常気象及び気象災害について記憶するもののみを列記してみたい。

元より正確な記録によるものではないので科学的価値は低いけれど…。

一、大正年間の雷の被害について

大正年間には激しい雷が割合多かつたようで、実例を二つあげる。(大正十年代か)

①山崎町上牧谷の〇氏宅に某日落雷、一度に三人が死亡したと伝えられている。

②山崎町下牧谷T氏宅に三年続けて落雷し、三年目には家屋が全焼した。この落雷では、伊沢川を隔てた宇野地区へ電気が飛び、宇野で一人死亡した。この人は屋外で被害にあったのだが、どうい理由で相当の遠距離まで被害が及んだのであろうか。

二、山崎町における干魃の記録

山崎町上寺に小さい石碑があり、これには大干魃記念と彫られ、一面には大正十三年六月一日より八月二十四日まで、八十五日間とある。ごく小さい目立たない石碑だから、多くの人が見落

としているのではなからうか。

八十五日間降雨がなかったならば、相当の被害が生じたものと思われる。

山崎町横須南方(登山口は上寺と最上山)に篠ノ丸城跡がある。そこに「一本松」という松の巨木があった。その巨木が大旱魃の時に雨乞いのため焼き枯らされたという言い伝えを聞いた。

三、一宮町の山津波

昭和五十一年九月十三日、数日間豪雨が続き、各地で被害が生じたが、特に一宮町の生栖・福知地区の土石流の被害は甚大だった。この地は旧下三方村の中心地で、小学校、幼稚園、診療所、郵便局、駐在所、公民館などの公共施設と、住宅や店舗が立ち並んでいたところだった。この災害は前線の停滞と、沖縄付近で発生した非常に強い台風十七号が北上したためであった。一年の降水量の三分の一が六日間に降るといふ異例の大雨であったという。この災害について、詳しくは一宮町の災害を記録する会が編集し、一宮町が昭和五十二年五月に発行した『記録山津波』を是非ご覧いただきたい。

四、平成七年十二月の大雪

平成七年十二月二十五日記録的な大雪が降り、山崎町の中心部でも積雪が六十cmに達した。この降雪は宍粟郡や佐用郡で異常に多く、但馬の方が少なかったという。

『山崎歴史街道』 (十八)

●山崎の史跡巡りをしませんか●

会報部

五十三 石水山奥の院 (通称観音さん)

所在地 宍粟市山崎町下牧谷

伊水小学校校門手前を左折し、西の山麓の方へ川を越して行く
と石水山奥の院 (通称観音さん) があります。この寺は真言宗石
水山金蔵寺の奥の院です。ご本尊は聖観世音菩薩です。

聖武天皇の御代の神亀年中 (七二四〜七二九) に行基によって
開かれたと言われています。しかし金蔵寺は天正八年 (一五八
〇) に長水合戦によって焼失しました。その後延享元年 (一七四
四) に再建されましたが、その後寺屋敷跡は畑や住宅となりまし
た。

奥の院は高さ七メートル幅一六メートルの大磐石があります。
その岸壁には穴が三つあり、その中に聖観世音菩薩が安置され霊
験あらたかな仏として信仰されています。

岩間から流れ落ちる清水は干ばつの時であっても枯れることな
く湧出しており、現在も「観音さんの名水」として遠方からも汲
みに来る人も多いようです。

また、この観音堂にまつわる「片目の魚」の伝説があります。

「しそうの逸話」によりますと、「観音堂の周りに広さ約八〇平
方メートル、深さ二〇〜三〇センチ程の池があり、その中に体長
三〜一〇センチ程の小魚が泳いでいる。昔、長水合戦のとき麓の
寺も戦火で焼け、その火が山へ燃え広がって奥の院の観音堂も焼
け落ちた。その時大部分の魚は死んだが清水の流れ込む近くの魚
は被害から免れはしたが片目は失った。それ以来この池で育った
魚は全部片目であった。」というものです。しかし、現在は池を
覗いてみるとどの魚も両眼とも有り、元気に泳いでいました。

また、山崎町史によりますと、観音寺金蔵坊として次のように
記載されています。その概略は次の通りです。

「宍粟には、船越山瑠璃寺系 (山伏) の寺院が数カ所あった。
瑠璃寺は真言宗高野派の本山である。開基は行基菩薩といい、
寺院であり同時に修験道も兼ね
て京都聖護院に属していた。宍
粟近辺の山伏を統括し、南光坊
とも称した。そのため宍粟には
瑠璃寺管轄下の修験者・山伏も
多く居住して加持祈祷を行って
いた。都多、青木、野々上、引
原そして下牧谷の金蔵坊も同じ
で皆山伏の寺であり、瑠璃寺管
轄の古い寺であった。」と記さ
れています。



観音堂と名水

パンフレット・デザイン広告・名刺・封筒・伝票
新聞広報誌・ポスター・案内状・シール等



(有) 稲田印刷

〈本 社〉〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764
〈一宮店〉〒671-4133 兵庫県宍粟市一宮町須行名496
TEL (0790) 72-8600 FAX (0790) 72-8611

山陽 盃

清酒



兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造有限公司



コスモ旅行 株式会社

兵庫県知事登録第2-304号
(社) 全国旅行業協会会員 一般旅行業務取扱主任 三木素尊

兵庫県宍粟市山崎町中井7番地の4(咲ランド1階)
TEL (0790) 63-0075
FAX (0790) 63-0077



外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL 620036

いぎだに 生谷温泉 伊沢の里

いつも伊沢の里をご利用くださりましてありがとうございます。心から感謝を申し上げます。これからも、是非、お祝い、ご法要、ご会食、団欒など会席料理から鍋物、そして定食など、なんなりと是非お申し付けくださいませ。ご予算に応じて調理させていただきます。また、無料送迎バスもご利用ください。おいでをお待ちいたしております。

Tel.0790-63-1380 Fax.0790-63-0362

PHOTO-STUDIO Ueyama P.C.S

スタジオウエヤマ

●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

心のゆとりのおてつだい

安井書店

YASUI BOOKS

本 店 TEL (0790) 62-0700
さつき通り FAX (0790) 62-2117
ブックランド店 TEL (0790) 64-2051
山崎町中井 FAX (0790) 64-2052